

再発見・牛久第二十八話

牛久市文化財保護審議委員

栗原 功くりはら いさお

第18回東京オリンピック

昭和39年開催

『聖火県内リレー』に参加

― 牛久町の中・高生七名が

正・副・随走者として

美浦村内を走る―

広報うしく掲載の記事・写真

発行日・昭和39年10月20日

世紀の祭典であるオリンピックが東京で開かれ、それに伴って聖火リレーも各地で盛んに行なわれました。

2日に栃木県から引き継がれた聖火は、第四コースを若者たちによってリレーされ、4日、土浦市役所に午後到着し、1泊しました。

この聖火は翌5日に市役所を午前11時出発、そして霞ヶ浦を左に各中継所をすぎ、阿見町を経て、牛久の選手たちが待つ美浦中学校前で、午後0時17分に引き継がれました。

選手たちは、みなランニングの胸に五輪のマークと日の丸が鮮やかに染め出され、白パンツ、白靴で炎天下、汗とほこりにまみれながら美浦中学校前から、約2キロ先の大谷まで走り続けました。

大谷には午後0時28分、予定どおり79区の正走者柳井哲也君(18・一厚)が、右手に聖火トーチを高だかとかざして到着すると同時に、地元小学生音楽隊ファンファーレが鳴りひびきました。

この日は平日にもかかわらず大谷の引き継ぎ所付近には「ひと目聖火を見よう」と、この町からかけつけた人たちが数百人をはじめ、約3千人の観衆が集まって盛んな歓迎をしました。

この聖火は、千葉県を経て、東京へ入ったわけです。

聖火リレーの隊形は正走者1名、副走者2名、随走者20名の合計23名で、このうち町から選ばれた7名の選手たちは次の諸君です。

- ▽正走者＝柳井哲也(18・一厚)
- ▽副走者＝唯根 勉(18・正直)
- ▽随走者＝稲葉茂樹(16・神谷)

- 大隅秀晴(16・本町)
- 佐久間孝(15・桂)
- 池辺勝幸(15・田宮)
- 高木 治(15・文化)

幻の東京オリンピック開催

― 昭和15年(1940年)9月―

昭和11年(1936年)8月のベルリン・オリンピックの際のIOC(国際オリンピック委員会)総会において、昭和15年(1940年)9月のオリンピック開催地は東京(当時は東京都ではなく東京市)に決定した。

東京でのオリンピック開催が決まると、同年12月に東京市長横山助成を中心として国を挙げての『第12回オリンピック東京大会組織委員会』が設けられた。

オリンピック開催への準備が着々と進められる中で、翌12年(1937年)7月に、中国・北京郊外で盧溝橋事件(日本軍と中国軍との間で起きた衝突事件)が

勃発した。これが中国国内の抗日気運の高揚とあいまって、日中の全面戦争へと拡大していった。

日本軍の戦線が拡大の一途をたどると、国際社会における日本批判が勢いを増し、日本の国内でも、東京オリンピックを開催すべきではない、という考え方が広まり、第一次近衛内閣が昭和13年(1938年)7月5日の閣議で『東京オリンピック大会を返上することに決定』した。



正走者柳井哲也君を先頭に、副走者唯根勉君、随走者稲葉茂樹君、大隅秀晴君、佐久間孝君、池辺勝幸君、高木治君。聖火は大谷の引き継ぎ所へ。※写真も「広報うしく」より引用。